朝のこと

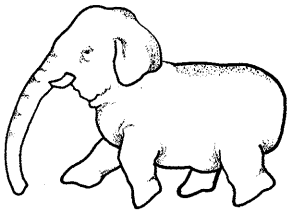
高橋　陽子

「先生、おはよう」、今日も一番に駆け込んできた、Aくん。「おはよう、今日も一番ね。でも、お母さんは？」と聞くと、照れ笑いをして、そのうちお母様が入っていらっしゃる。当園では、園児は保育室まで保護者と一緒に登園し、手洗い・うがいを済ませて、各自、遊び出す、という生活の流れがある。

一緒に入ってきて欲しい、という思いから、「お母さんは？」と毎朝聞いてしまうが、彼は、笑ったり、来る途中のことや、家から作ってきたものの話などして、そのうち手洗い・うがいを済ませている。ついこの前まで、「うがいはしましたか？」なんて聞いていたものだから、「先生、手洗って、うがいもしたから、紙頂だい」と、要求をストレート

に言えなくしてしまったな、と心の中で苦笑いしながら、Aくん、一年数か月通園することで、自分から生活を始めるようになったね、と頷き、「紙、か……」と迷わされる。

そんなことを思っているうちに、次々に登園してくる。母親と向かい合わせに両手をつなぎ、さか上がりのようなことをして、「じゃあね」と別れる子。「先生、一緒にママにバイバイして」と私の手をとる子（年中からの入園で初めは泣いて離れられなかったのが、自分で家庭と幼稚園の生活を切り離す方法を探っていて、あと一歩のところまできているな）。「おはようございます」の声はとても元気に入ってくるのに、本棚の横に置いてあるイスに座って、数十分、本を読み続ける子。「お外行ってきます」と、さっさと靴をはき替える子（私も「行ってらっしゃい」と元気よく送り出せる。「先生も一緒に行こう」と言われると、「まだ全員きてないから、今は行けないわ」「それじゃ、あとで来てよ」。一瞬、ことばに詰まりながら、「お時間あいたら行くから、先に行っていてね」と、いつ行けるとも知れない約束をしてしまう）。木製の汽車とレールにとびつき、黙々と遊び始める子（年中から入園の子どもたちで、気持ちの安定を計るとともに、回りを探って幼稚園での過ごし方を自分たちなりに考えているらしい）。教卓の下にもぐり込み、険しい目つきで辺りを見回している子。さっと自分用の引出しからミニ四駆（私が長方体の箱を作り動くようにタイヤをつけ、子どもが、改造する、と言って、色を塗っ



たり、ウイングをつけたりしたもの）を取り出し、小型積木や板や時にはイスなど組み合わせてレース場を設定する子、などなど、十人十色のスタートをきる。

朝はとにかく、全員の子どもたちと元気に挨拶して、それぞれが遊び出すのをにこやかに見守りたい、と願っているが、実際に三十三名の子どもたちが二十分位の間に次々に登園し、色々な表情を持ち、色々な生活のスタートをきられると、さて全員とどんな顔で挨拶したかすらわからなくなってしまうこともある。

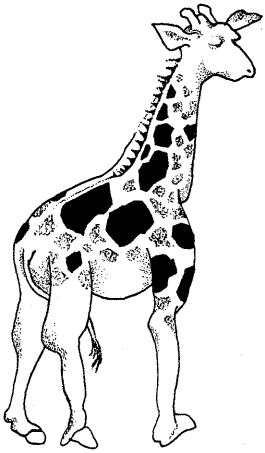
三年保育の女の子たちは、つき合い始めて一年数か月も経ち、その子なりに、あの子はどんな子、とわかってきていて、○○をして遊びたいという思いより、誰と一緒にいたいという思いがとても強く出ている。そのためか、部屋に入ると、その子が来ているか、他の子と遊び始めてはいないか、が気になるし、来ていなければ待ち続け、来るなり「一緒に遊ぼう」と言いにかけ寄る。それで安定できるのだし、幼稚園という生活の場にスムーズに入りこめているし、いつも同じ二人の組み合わせではないのだが、気にかかってしまう。その日のペアがままごとコーナーに入ったとすると、次に来た人からは遠慮してしまう。他の子とくっつければ、そこから絵本屋さんや外に行くといった遊びが生じるが、ままごとをしている女の子と遊びたい、と思いをふくらませて登園してきた子にとっては、辛い思いを味わうことになる。ままごとをしたい、という思いの子は、誰がいようと入りこみ、ダメと言われても、道具をコーナー外に持ち出してままごとにこだわる。それができない子は、猫になって「ニャーニャー」と言いながらすり寄っていったり、「先生、入れてくれない」と言ってきたり、どうにか入る方法を考えてアタックする。私が救いを求められ

た時、まだ全員に挨拶していないから、は通用しない。「○○ちゃんも一緒にしたいって」と言ってみるが、「え――」と、拒否されるのは当然。二人で安定しているのだから、○○ちゃんが入ってもきちんと仲間として受け入れられて、三人が楽しい、と思えるかしらと頭には?がつきながらも、三人目の子の気持ち、特に一日のスタートがかかっていると思えば、「どうして入れないの?」と再挑戦してみる。二人で顔を見合わせて黙っていれば、個人的に「△△ちゃんはどう思う?」と聞いてみる。大抵、個人的に聞くと「いいと思うけど」の返答をもらえる。二人が共通の手作りのアクセサリーをつけている場合は、「これと同じのがあれば入っていいよ」となり、大急ぎで作り、ままごとコーナーへと送り出す。三人で盛りあがることもあるし、私の頭の?のようになって、赤ちゃん役で寝ているだけだったり、いつの間にか抜けてしまっていることもある。

「先生」、大きな声が園庭に出るドアのところからする。二年保育から入園のBちゃんである。入園当初は、集団生活は初めて、ということで私を先生、と認めてくれるどころか、近づくと逃げて行くこともある子だった。広い場所で自由を存分に楽しんでいることも理解できたし、降園時にはきちんと戻ってくる様になってきたし、誰かが何かを持っていると、「頂だい」と言う様になってきての、朝一番の「先生」である。「何かしら」と嬉しく近づいていくと、Bちゃんの表情が変わってしまった。母親がまだ部屋にいて、その視線をBちゃんが察知した瞬間だった。聞かれてはいけないことを言ってしまったかのようだったが、私は何事もなかった如く、「なあに」と言い、園庭の方へ誘ってみる。まだ気になる様だったが、年長児が種を蒔いた植木鉢を指して、「違う葉っぱが出てる」と教えてくれる。毎朝、この鉢を見るのが楽しみらしく、「何にも出て

ないね」「葉っぱが出てきたよ」と観察してから、遊びに出かけていた。子どもなりに、考えての幼稚園の生活に入るための手段が、母親の視線によって家庭へと戻されてしまったのかしら、と思いつつ、それでも園庭へ駆け出していったBちゃんの逞しさを嬉しく思った。もう一つ、母親絡みのことであるが、部屋に入るなり、「あのね」と私の参加できなかった地曳網の行事の様子を話してくれようとしたCくん。彼が来るまでの十数人はいつもの朝を迎えていて、私としては、誰かお話ししてくれるかしら、と期待感が無きにしもあらずだったので、「うん、うん」と聞いていると、母親がきて、「手、洗ったの?」とことばを遮えぎる。Cくんはそのまま流し台の方へ行き、結局それ以上は聞くことができなかった。Cくんの母親は経緯がわかっていなかったので、所定のことを済ませたか、が気になり、声をかけたのであろう。私も登園してくる子どもの思いを汲む前に、「うがいをしましょうね」「手を洗いましたか」と言っていることがあるので、母親に同感しながら二人の背を見つめてしまった。

他にも色々な朝の風景があり、子どもたちを迎える二十分間、ずっとにこやかに、といかない場面は、数限りない。そのうえ、「はい」と言ってしまえば気にならないものの、私自身の中に決めかねてしまい、一瞬、表情が硬ばってしまうことがある。



初めに書いた「紙、頂だい」と「〇〇作って」の二つのことばである。Aくんなどは、紙を渡せば本人なりの工夫で盾や腕にはめる武器などを作り出してくる。年少時は、何か私に描いてもらい、Aくんが色を塗り、切って、「お面にして」と、一穴パンチで穴をあけ、ゴムを通してもらう、というやりとりだったのが、今では自分なりに作りたいものがあって、紙を要求する。でも、私はそこで、前日も前々日も、一つ作りあげる度にもう一枚、もう一枚、といわれ、一日に五枚も六枚も渡していたことを思い出す。Aくんだけではなく、紙を要求してくる子どもには、つい、ある物で遊んで欲しい、との思いから、その子の朝の気持ちを知ろうとする前に、ためらってしまうのである。

「〇〇作って」に対しても、ためらいが生じることが多い。仲間に入るために同じ物を作って欲しい、という気持ちから言ってきた場合は、わかり易いし、それなら、とすぐにでも作るが、その子どものイメージの中にあって、そのことばを聞いただけでは、私の中にイメージとして共有できないものや、年中時のこの時期に、一人に応えることでの他への影響を考えてしまうものに対しては、返答に困ってしまう。朝から「それは作れないの」と拒否することばを何度言ってきてしまったことか。落ち込みそうになる。が、子どもたちの朝は始まっている。私の対応がどんなであれ、自分たちなりに生活をスタートさせられる子どもの力に感服しながら、複雑な思いを抱かざるを得ない私。せめて、明るく元気に朝の挨拶を交わし、その子なりに遊び出していくのをにこやかに見送りたいと願う毎日である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）